

しんぱん
しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいにしょう
じっせん
第二章 実践

なんのこ
難を乗り越える

すで にじゅうよねん あいだ ほうもん もう ひび つきづき ねんねん

既に二十余年が間この法門を申すに、日々・月々・年々

なん 重 しょうしょう なん 数 知 だいじ なんしど

に難かさなる。少々の難はかずしらず、大事の難四度な

にど 置 おうなん にど 及 このたび

り。二度はしばらくおく。王難すでに二度におよぶ。今度

わ しんみよう およ うえ でし だんな

はすでに我が身命に及ぶ。その上、弟子といい、檀那と

ちようもん ぞくじん きた じゅうか おこな

いい、わずかの聴聞の俗人なんど来つて重科に行わる。

むほん もの

謀反なんどの者のごとし。

かいもくしょう

005 開目抄

なん の こ

難を乗り越える70ページー12行

にちれん けんちようごねんいらいにじゅうすうねん あいだ ほうもん ひろ

すでに、日蓮は建長五年以来二十数年の間、この法門を弘め

ひび つきづき ねんねん とき

なん

てきたが、日々・月々・年々と時のたつにつれて難がかさなつてき

わるくち う

ちい なん いくど かず し

ています。悪口や打たれるような小さな難は幾度か数も知れませ

るざい しざい だいなん

よんど

にど

ん。流罪・死罪の大難はすでに四度におよび、そのうち二度はさてお

にど おうなん おんとう ついほうるざい

こんど たつ くち

いて、二度は王難で遠島に追放流罪されました。今度（竜の口

ほうなん さどるざい

しんみよう

い

法難および佐渡流罪）はすでにわが身命におよぶもので、生きなが

ふしぎ

でし だんな

らえることがむしろ不思議なくらいです。そのうえ、弟子も檀那もい

ちようもん

ぞくにん

とら

じゅうざい

うにおよばず、わずかに聴聞した俗人なども捕えられて重罪に

しよ むほんにん

たい

処されているのは、謀反人などに対するようなものです。

そ しょうに きゅうじ くわ かなら ふぼ 怨
夫れ、小児に灸治を加うれば、必ず父母をあだむ。

じゅうびよう もの りようやく 与 さだ くち にか 憂

重病の者に良薬をあたられば、定めて口に苦しうれ

ざいせ 然 ないしどうまつへんど やま やま 重

う。在世なおしかり、乃至像末辺土をや。山に山をかさ

なみ なみ 畳 なん なん くわ ひ ひ 増

ね、波に波をたたみ、難に難を加え、非に非をますべし。

かいもくしょう

005 開目抄

なん の こ

難を乗り越える72ページー5行

ほけきよう ろくなんく い わきま

いつさいきよう 読

従

法華經の六難九易を弁うれば、一切經よまざるにしたが

うべし。

(005 開目抄 かいもくしょう)

難なんを乗のり越こえる 101 ページー 8 行)

われ わ でし しよなん うたが こころ じねん
我ならびに我が弟子、諸難ありとも疑う心なくば、自然

ぶっかい てん かご うたが
に仏界にいたるべし。天の加護なきことを疑わざれ。

げんせ あんのん 歎 わ でし ちようせき
現世の安穩ならざることをなげかざれ。我が弟子に朝夕

おし うたが みな捨 拙 もの
教えしかども、疑いをおこして皆すてけん。つたなき者

習 やくそく こと とき 忘
のならいは、約束せし事をまことの時はわするるなるべ

し。

（005 開目抄 かいもくしょう）

なん の こ
難を乗り越える 117 ページ 7 行

わたし にちれんだいしょうにん わたし でし だいなん
私（日蓮大聖人）と私の弟子はどのような大難にあつても、

みようほう うたが ころろ

しぜん じょうぶつ きょうがい

妙法を疑う心をおこさなければ、自然に成仏の境界にいたる

しよてんぜんじん しゅづ

ほけきよう

でしよう。たとえ諸天善神が守護しないからといって、法華經の

だいくどく うたが

げんざい あんのん

なげ

大功德を疑ってはなりません。現在が安穩でないことを嘆いては

でし あさばん

なん お

おし

なりません。わが弟子に朝晩このこと（難の起こること）を教えて

うたが

お

たいてん

つたな

きたのに、疑いを起こしてみな退転してしまいました。拙いもの

なら

へいじよう

とき

やくそく

とき

わす

の習いとして、平常の時に約束したことをまことの時に忘れるの

です。

わ で し とう なか か ちようもん だいしよう なん

我が弟子等の中にも、兼ねて聴聞せしかども、大小の難

きた とき いまはじ おどろ きも しんじん やぶ か

来る時は、今始めて驚き、肝をけして信心を破りぬ。兼

もう きようもん さき ゆたおんしつ

ねて申さざりけるか、経文を先として「猶多怨嫉。」

きようめつどご きようめつどご ちようせきおし

況滅度後。況滅度後」と朝夕教えしことは、これなり。

によせつしゆぎようしろう

036 如説修行抄

なん の こ

難を乗り越える 599 ページー14 行

あわ いま にほんこく ばんにん にちれん

でしだんな

哀れなるかな、今、日本国の万人、日蓮ならびに弟子檀那

とう さんるい ごうてき せ だいく あ み よろこ わら

等が三類の強敵に責められ大苦に値うを見て悦んで笑う

きのう ひと うえ きよう み うえ にちれん

とも、昨日は人の上、今日は身の上なれば、日蓮ならびに

でしだんなとも そうろ いのち ひかげ ま ただいま

弟子檀那共に霜露の命の日影を待つばかりぞかし。只今

ぶっか かな じゃつこう ほんど こじゅう じじゅほうらく とき

仏果に叶って寂光の本土に居住して自受法楽せん時、

なんだち あ びだいじよう そこ しず だいく あ とき われ

汝等が阿鼻大城の底に沈んで大苦に値わん時、我らいか

むざん おも なんだち 羨

ばかり無慙と思わんずらん、汝等いかばかりうらやましく

おも

思わんずらん。

いちご す ほど な ごうてきかさ

一期を過ぐるごと、程も無ければ、いかに強敵重なると

も、ゆめゆめ退する心なかれ、恐るる心なかれ。
たい おそ

036 如説修行抄

難を乗り越える 604 ページ 13 行

ほんとう

本当にかわいそうなことです。いま日本中のあらゆる人びとは、

にちれん

でし

しんじや

さんるい

ごうてき

せ

くる

日蓮と弟子・信者たちが三類の強敵に責められて、たいへんな苦

み

よろこ

わら

きのう

ひと

しみにあっているのを見て、喜んで笑っていますが、「昨日は人の

うえ

きよう

み

うえ

よ

つね

なら

にちれん

でし

上、今日はわが身の上」とは世の常の習いで、いま日蓮と弟子・

しんじや

う

くる

しも

つゆ

たいよう

ひかり

信者たちが受けているこの苦しきも、ちようど霜や露が太陽の光

き

あいだ

しんぼう

にあつて消えてしまうように、わずかの間の辛抱ではありません

じょうぶつ　かな　じゃつこう　ほんど　ほとけ　す　せかい
か。そしてついに成仏が叶って寂光の本土（仏の住む世界）に
す　じじゅほうらく　じょうぶつ　きようがい　はんたい

住んで自受法樂するとき（成仏の境界になったとき）、反対にあ

ほうぼう　もの　あびじごく　そこ　しず　くる

なたたち謗法の者が、阿鼻地獄の底に沈んでたいへんな苦しみにあ

わたし　すがた

うのですが、そのとき、私たちはその姿をどんなにか、かわいそう

おも　わたし

に思うことでしょう。あなたたちは私たちをどんなにかうらやま

おも　いっしょう　つか　ま　す

しく思うことでしょう。一生は束の間に過ぎてしまうものなので、

さんるい　べうてき　つぎつぎ　おそ　たいてん　こころ

どんなに三類の強敵が次々に襲ってきても、けっして退転する心

おそ　こころ

をおこしてはいけません。恐れる心をもつようなことがあつてはな

りません。

まつぼう

いま

にちれんとう

たぐ

しゅぎよう

みようほうれんげきよう

末法において、今、日蓮等の類いの修行は、妙法蓮華經

しゅぎよう

なんきた

あんらく

こころう

を修行するに、難来るをもつて安樂と意得べきなり。

おんぎくでん

(095 御義口伝

なんのこ

難を乗り越える

1045

ページー4行)

まつぼう

にちれん

もんか

しゅぎよう

だいごほんぞん

しん

じぎよう

末法において日蓮とその門下の修行は、大御本尊を信じ、自行

けた

ぶつどうしゅぎよう

なん

お

化他にわたる仏道修行をはげんで難が起きてくることをもつて

あんらく

安樂であるところえていくべきなのです。

にちれんよろこ

い

もと

ぞんち

むね

せつせんどうじ

日蓮悦んで云わく、本より存知の旨なり。雪山童子は

はんげ

み

投

じようたいぼさつ

み

売

ぜんざいどうじ

半偈のために身をなげ、常啼菩薩は身をうり、善財童子

ひい

ぎようぼうばんじ

かわ

剥

やくおうぼさつ

ひじ

焼

は火に入り、樂法梵志は皮をはぐ。藥王菩薩は臂をやく。

ふきようぼさつ

じようもく

被

ししそんじや

こうべ

刎

不輕菩薩は杖木をこうむり、師子尊者は頭をはねられ、

だいばぼさつ

げどう

殺

提婆菩薩は外道にころさる。

(107種々御振舞御書

しゅじゅおんふるまいごしよ

なんのこ

難を乗り越える

1226

ページー10行)

おのおのわ でし 名乗 ひとびと ひとり 臆 思

各々我が弟子となのらん人々は、一人もおくしおもわるべ

親

からず。おやをおもい、めこをおもい、所領をかえりみ

妻子

しよりよう

顧

むりようこう

親子

ることなかれ。無量劫よりこのかた、おやこのため、

しよりよう

いのち

だいちみじん

多

所領のために命すてたることは大地微塵よりもおおし。

ほけきよう

いちど

ほけきよう

法華經のゆえにはいまだ一度もすてず。法華經をばそこば

ぎよう

しゅつたい

たいてん

止

く行ぜしかども、かかること出来せしかば、退転してや

たと

湯 沸

みず

い

ひ

き

遂

みにき。譬えば、ゆをわかつて水に入れ、火を切るにとげ

おのおのおも

き

たま

み

ほけきよう

替

ざるがごとし。各々思い切り給え。この身を法華經にかう

いし こがね

ふん

こめ

るは、石に金をかえ、糞に米をかうるなり。

（107種々御振舞御書

しゅじゅおんふるまいごしよ

なんのこ

難を乗り越える 1227ページ（5行）

がたにちれん でし なの ひと ひとり おくびよう こころ お

あなた方日蓮の弟子と名乗る人びとは一人も臆病な心を起こし

だいなん

おや

しんぱい

さいし

てはなりません。（大難のときには）親のことを心配したり、妻子の

しんぱい

りようち

かえり

むりようこう

とお

ことを心配したり、領地を顧みてはなりません。無量劫の遠い

むかし

こんにち

おや こ

しりよう

いのち

す

昔から今日まで、親や子のため、また所領のために命を捨てた

だいち

つち

かず

おお

ほけきよう

ことは大地の土の数よりも多かつたにもかかわらず、法華経のために

いのち

す

いちど

かこ

ほけきよう

すこ

命を捨てたことはいまだ一度もありません。過去に法華経を少しは

しゅぎよう

だいなん

お

たいてん

修行したけれども、このような大難が起きてくると退転してしま

つたのです。それはたとえばせつかく湯ゆを沸わかしておきながら水みづにい

れてしまい、火ひをおこすのに途中でやめておこしきれないようなもの

いま

かくご き

み ほけきよう

です。今こそあなたがたは覚悟を決めなさい。この身を法華經のため

す

いし こがね

と か

ふん こめ こうかん

に捨てるのは、石を黄金と取り替え、糞を米と交換するようなもの

です。

かみ 責

たも

ほけきよう

しん

いろ

上のせめさせ給うにこそ、法華経を信じたる色もあらわれ

そうら

つき

欠

満

潮

干

満

うたが

候え。月はかけてみち、しおはひてみつこと疑いなし。

ばち

かなら

とく

何

歎

これも罰あり。必ず徳あるべし。なにしにかなげかん。

119 土木殿御返事（依智滞在の事）

ときどのごへんじ

えちたいざい

こと

なんのこ

難を乗り越える

1277 ページ 1 行

ほうもん にちれんもう ゆえ ちゅうげんみみ さか どうり ゆえ

この法門を日蓮申す故に、忠言耳に逆らう道理なるが故

るざい いのち およ

に、流罪せられ、命にも及びしなり。しかれども、いま

懲 そろろ

だこりず候。

そやどのごへんじ じょうぶつようじんしょう

165 曾谷殿御返事（成仏用心抄）

なん の こ

難を乗り越える 1435 ページ 12 行

にちれん ほうもん もう あ

日蓮はこの法門を申し上げることによって、忠言は耳に逆らう

どうり るざい いのち およ なん う

の道理から、流罪され、命にも及ぶ難を受けたのです。しかしなが

ら、いまだこりてはおりません。

ちゅうげん みみ さか

てんだいさん りゅうもん もう ところ

たきひやくじよう

はる はじ

天台山に竜門と申す所あり。その滝百丈なり。春の始

うおあつ

たき のぼ

ひやくせん

ひと

のぼ

うお

めに魚集まつてこの滝へ登るに、百千に一つも登る魚は

りゅう な

たき はや

や

す

でんこう

す

竜と成る。この滝の早きこと、矢にも過ぎ、電光にも過

のぼ

うえ

はる

はじ

たき

ぎよあつ

ぎたり。登りがたき上に、春の始めにこの滝に漁父集まつ

うお

と

あみ

か

ひやくせんじゅう

い

と

て魚を取る。網を懸くこと百千重、あるいは射て取

く

と

わし

くまたか

とび

ふくろう

とら

り、あるいは酌んで取る。鷺・鷗・梟・虎・

おおかみ

いぬ

きつねあつ

ちゅうや

と

く

じゅうねん

狼・犬・狐集まつて昼夜に取り噉らうなり。十年

にじゅうねん

ひと

りゅう

うお

二十年に一つも竜となる魚なし。

あきもとごしよ

なんのこ
難を乗り越える 1465 ページ 15 行

ちゅうごく てんだいさん りゅうもん

ところ

たき たか

中国の天台山に竜門という所があります。この滝は高さが

ひやくじよう

まいとし

はる はじ

さかな あつ

たき

百丈もあります。毎年、春の初めには魚が集まってきてこの滝

ひやくせん

ひと

さかな

をのぼろうとしますが、百千ものうち一つでものぼりきつた魚は

りゅう

たき

なが

はや

はし

や

竜になるといわれます。この滝の流れの早いことは走る矢にもまさ

はや

たき

はる

り、いなびかりよりも早いのです。滝はのぼりにくいうえに、春の

はじ

りようし

き

さかな

ひやくじゅう

せんじゅう

あみ

初めには漁師が来て魚をとるために百重、千重にも網をか

とう

い

け、さらにモリ等で射てとつたり、すくいとつたりします。そのう

わし

くまたか

とび

ふくろう

とら

おおかみ

いぬ

きつね

あつ

え、鷲・鵬・鴟・梟・虎・狼・犬・狐も集まってきて、

ひる よる さかな

く

じゅうねん

にじゅうねん

昼も夜も魚をとって食っています。そのため十年、二十年に

ひと りゅう

さかな

一つとして竜になる魚はありません。

ほうもん もう
この法門を申すには、 必ず魔出来すべし。 魔競わずば、

しょうほう し
正法と知るべからず。

だいご まき い ぎょうげすで つと さんししょうしま

第五の巻に云わく「行解既に勤めぬれば、三障四魔、

ふんぜん きそ お ないししたが おそ

紛然として競い起こる乃至随うべからず、畏るべから

したが ひと ひき あくどう む

ず。これに随えば、人を將いて惡道に向かわしむ。これ

おそ しょうほう しゆ さまた とううんぬん

を畏るれば、正法を修することを妨ぐ」等云々。この

しやく にちれん み あ もんけ みようきよう

釈は、日蓮が身に当たたるのみならず、門家の明鏡な

つつし なら つた みらい しりよう

り。謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ。

きようだいしろう

難のこ
難を乗り越える 1479 ページ 12 行

ほうもん と

ま

ま きそ お

この法門を説くと、かならず魔があらわれるのです。魔が競い起こ

ほう しょうほう

かんが

らなかつたならば、その法が正法であると考えてはいけません。

まかしかん

だいご まき

ぶつぼう たも

ぎょうげ すす

「摩訶止観」の第五の巻には「仏法を持ち、行解が進んできたとき

さんしょうしま ふんぜん

きそ お

ちゅうりやく

には、三障四魔が紛然として競い起こってくる。（中略）だが

さんしょうしま

したが

おそ

三障四魔にけっして随ってはない。畏れてはない。これに

したが

ひと あくどう む

おそ

随ったならば、かならず人を悪道に向かわせてしまう。これを畏れ

しょうほう しゅぎょう

と

るならば正法を修行することができなくなる」と説かれていま

しかん

しゃく

にちれん み

もんけ

す。止観のこの釈は、日蓮の身にあてはまるばかりでなく、門家

いちどう めいきよう

一同の明鏡です。

つつし

謹んで習い伝えて、

なら

つた

未来永久に修行の糧

みらいえいきゆう

しゅぎよう

かて

としなさい。

潮 干 満 つき い 入 なつ あき ふゆ

しおのひるとみつと、月の出ずるといると、夏と秋と、冬

はる 堀 かなら そうい ぼんぷ ほとけ

と春とのさかいには、必ず相違することあり。凡夫の仏

かなら さんしょうしま もう さわ 出

になる、またかくのごとし。必ず三障四魔と申す障りい

けんじや ぐしや しりぞ

できたれば、賢者はよろこび愚者は退く、これなり。

ひようえのさかんどのごへんじ さんしょうしま こと

176 兵衛志殿御返事（三障四魔の事）

なん の こ

難を乗り越える1488ページー4行

しお ひ み つき で い なつ

潮が引くときと満ちるときと、月の出るときと入るときと、夏と

あき ふゆ はる か め ふだん ちが お

秋と、冬と春との変わり目には、かならず普段と違ったことが起こ

ぼんぷ ほとけ おな

るものです。凡夫が仏になるときもそれと同じことです。かならず

さんしょうしま

しょうがい

あらわ

けんじゃ

よろこ

三障四魔という障害が現れてきますが、賢者はそれを喜び、

ぐしや

おそ

たいてん

愚者は恐れて退転するのです。

ほとけ

そうろう

しゅみせん

針

立

か

仏になり候ことは、この須弥山にはりをたてて、彼の

しゅみせん

糸

放

直

須弥山よりいとはなちて、そのいとのおうや、さかさまに

針

穴

い

難

況

逆

はりのあなに入るよりもかたし。いおうや、さかさまに

おおかせ

吹

向

難

大風のふきむかえたらんは、いよいよかたきことぞかし。

ひようえのさかんどのごへんじ

さんしゅうしま

こと

176 兵衛志殿御返事（三障四魔の事）

なんのこ

難を乗り越える 1488 ページ 9 行

にちれん

ごうしよう

消

果

みらい

りようぜんじようど

詣

日蓮、この業障をけしはてて未来は靈山浄土にまいるべ

思

しゆじゆ

だいなんあめ

降

くも

湧

しとおもえば、種々の大難雨のごとくふり雲のごとくにわ

そちら

ほけきよう

おんゆえ

く

く

き候えども、法華經の御故なれば、苦をも苦とおもわ

ず。

(191 四糸金吾殿御書

しじようきんごどのごしよ

なんのこ

難を乗り越える

1514

ページー16行)

ほけきよう ぎようじゃ ひ ぐら たきぎ かぜ だいな

法華經の行者は火と求羅とのごとし。薪と風とは大難の

ほけきよう ぎようじゃ く おんちようじゆ によらい しゆぎよう

ごとし。法華經の行者は久遠長寿の如来なり。修行の

えだ うたが

枝をきられ、まげられんこと、疑いなかるべし。これよ

のち しきようなんじ しじ ざんじ あん たも

り後は、「此經難持」の四字を暫時もわすれず案じ給うべ

し。

しじようきん ごどのごへんじ しきようなんじ こと

(199 四条金吾殿御返事 (此經難持の事))

なん の こ

難を乗り越える 1545 ページ 2 行

1545

ほけきよう ぎようじゃ ごほんぞん しん じっせん ひと ひ ぐら かぜ ふ

法華經の行者 (御本尊を信じ実践する人) は火と求羅 (風が吹

ばいぞう い もの たきぎ かぜ おお なん

くと倍增する生き物) とのようなもので、薪と風とは大きな難の

ほけきよう　ぎようじや　えいえん　せいめい　さと　ほとけ

ようなものです。また、法華經の行者は永遠の生命を悟った仏

まつ　おな　しゆぎよう　えだ　き　ま

です。だから、松と同じように、修行の枝を切られたり曲げられた

なん　うたが　あと

りするという難があることは疑いないのです。これから後は、

しきようなんじ　よじ　すこ　あいだ　わす　しさく　しんじん

「此經難持」の四字を少しの間も忘れず思索し、信心していくべ

きです。

ただ世間の留難来るともとりあえ給うべからず。賢人・

しょうにん

聖人もこのことはのがれず。

逃

ただ女房と酒うちのみて、南無妙法蓮華經となえ給

え。

(203 四条金吾殿御返事 (衆生所遊楽御書)

難を乗り越える 1554 ページ 10 行)

ただ、どんなに社会から迫害されても、相手にして争ってはいけ

ません。賢人や聖人でも、難にあうことは避けられないのです。た

だ、奥さんと酒を飲みかわして、南無妙法蓮華經と唱えていきなさ

しんじつ いっさいしゅじょう しきしん るなん とど ひじゅつ
眞実、一切衆生、色心の留難を止むる秘術は、ただ

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経なり。

しじようきんごどのごへんじ るなん とど ひじゅつ こと
(211 四条金吾殿御返事 (留難を止むる秘術の事))

なん の こ
難を乗り越える 1598 ページ 8 行

ひと

ただ

しきしん

なん

う

あらゆる人びとにとって、正しく色心にわたる難を打ちやぶる

ゆいいつ

ほうほう

なんみようほうれんげきよう

いがい

唯一の方法は、ただ南無妙法蓮華経による以外にないのです。

われ げん だいなん あ ごしよう ほとけ 成

我ら、現にはこの大難に値うとも、後生は仏になりな

きゆうじ

とうじ

痛

のち

ん。たとえば灸治のごとし。当時はいたけれども、後の

くすり

薬なれば、いたくていたからず。

(219 聖人御難事

しょうにんごなんじ

なん の こ

難を乗り越える 1620 ページー12行)

わたし

ぶつぼう

だいなん

私たちはいまはこのように仏法のために、大難にあっています

のち

ほとけ

が、後にはかならず仏になることができます。それはたとえ

やいと

とき あつ

いた

のち

ば、灸治のようなものです。その時は熱くて痛いけれども、後には

くすり

いた

ほんとう

薬となるのですか、疼くても本当はいたくないのです。

ほけきよう しん ひと ふゆ ふゆ かなら はる

法華經を信ずる人は冬のごとし。冬は必ず春となる。い

むかし 聞 見 ふゆ あき 返

まだ昔よりきかずみず、冬の秋とかえられることを。いま

聞 ほけきよう しん ひと ぼんぷ

だきかず、法華經を信ずる人の凡夫となることを。

みよういちあまごぜんごしようにそく ふゆ かなら はる こと

(244 妙一尼御前御消息 (冬は必ず春となるの事)

なん の こ

難を乗り越える 1696 ページ 1 行)

ほけきよう しん ひと ふゆ ふゆ はる

法華經を信ずる人は冬のようなものです。冬はかならず春となり

ふゆ あき もど き

ます。いまだかつて冬が秋に戻ったなどということとは、聞いたことも

み おな ほけきよう しん ひと

見たこともありません。同じように、いまだかつて法華經を信ずる人

ぼんぷ き

が凡夫になってしまったなどということも聞いたことがありません。

まつぼう

ほけきよう

ぎようじやかなら

しゅつたい

だいなん

末法には法華經の行者必ず出来すべし。ただし、大難

きた

きうじよう

しんじん

よろこ

ひ

来りなば、強盛の信心いよいよ悦びをなすべし。火に

たきぎ

加

盛

たいかい

薪をくわえんに、さかななることなかるべしや。大海へ

しゆるい

たいかい

かわ

みず

かえ

衆流入る。されども、大海は河の水を返すことありや。

ほつきたいかい

ぎようじや

しよが

みず

だいなん

い

法華大海の行者に諸河の水は大難のごとく入れども、

返

答

しよが

みずい

かえすこと、とがむることなし。諸河の水入ることなく

たいかい

だいなん

ほけきよう

ぎようじや

ば、大海あるべからず。大難なくば、法華經の行者には

あらじ。

なんのこ
難を乗り越える 1720 ページ 9 行

まっぼう

ほけきよう

ぎようじゃ

しゅつげん

だいなん

末法には法華經の行者がかならず出現します。ただし大難が

ごうじよう

しんじん

お

よろこ

はげ

きたならば強盛に信心を起こして、ますます喜んで励んでいきな

ひ

たきぎ

くわ

ひ

さか

さい。たとえば、火に薪を加えるのに、火が盛んにならないという

たいかい

おお

かせん

なが

こ

ことがあるでしうか。また、大海には多くの河川が流れ込んでい

たいかい

かわ

みず

お

かえ

ますが、大海が川の水を押し返すようなことがあるでしうか。そ

おな

たいかい

ほけきよう

ぎようじゃ

だいなん

しよが

みず

れと同じように、大海のような法華經の行者に大難は諸河の水の

はい

ほけきよう

ぎようじゃ

お

かえ

ように入ってくるけれども、法華經の行者はそれを押し返すこと

しよが

みず

なが

も、とがめることもないのです。諸河の水が流れこむことがなければ

たいかい　そんざい

大海が存在しないように、

だいなん

大難がなければ法華經の行者ではない

ほけきよう

ぎようじや

のです。

ほうもん どうせいひと じようげ ろん しんじん と がた

この法門、当世の人、上下を論ぜず信心を取り難し。その

ゆえ ぶつぼう しゆぎよう げんぜあんのん のち ぜんしよ

故は、仏法を修行するは「現世安穩にして、後に善処に

しよう どううんぬん にちれんほつし ほけきよう ぎようじや

生ず」等云々。しかるに、日蓮法師、法華經の行者と

しよう るなんおお まさ し ぶつ い かな

称すといえども、留難多し。当に知るべし、仏意に叶わ

とううんぬん

ざるか等云々。

じやなん せんあん うち ごかんき こうむ のち

ただし、この邪難は先案の内なり。御勘氣を蒙るの後

はじ きようふ ゆえ ほけきよう もん

始めて驚怖すべきにあらず。その故は、法華經の文を

けんもん まつぼう い おし ほけきよう しゆぎよう

見聞するに、末法に入つて教えのごとく法華經を修行す

もの るなんおお よし きようもんかつかく まなこあ もの

る者は留難多かるべきの由、經文赫々たり。眼有らん者

はこれを見る^みか。

(284 波木井三郎殿御返事^{はきいさぶろうどのごへんじ})

難^{なん}を乗^のり越^こえる

1808

ペー
ジ
ー
7
行

とら 嘯

おおかぜ吹

りゆう 吟

くも 起

やと

虎うそぶけば大風ふく、竜ぎんずれば雲おこる。野兎の

嘯

ろば

嘶

かぜ吹

くも 起

うそぶき、驢馬のいばうるに、風ふかず、雲おこることな

ぐしや

ほけきよう

読

けんじや

ぎ

だん

とき

くに

騷

し。愚者が法華経をよみ賢者が義を談ずる時は、国もさわ

こと

しょうにんしゆつげん

ほとけ

ほけきよう

がず、事もおこらず。聖人出現して仏のごとく法華経

だん

とき

いつこく

ざいせ

過

だいなん

を談ぜん時、一国もさわぎ、在世にすぎたる大難おこるべ

見

そうろう

しとみえて候。

うえのどのごへんじ

ぼんたいおんはか

こと

311 上野殿御返事 (梵帝御計らいの事)

なん の こ

難を乗り越える 1866 ペー 8 行

とら

おおかぜ

ふ

りゆう

な

くも

お

「虎がほえれば大風が吹き、竜が鳴けば雲が起こる」といわれま

のうさぎ な

かぜ ふ

くも

すが、野兎が鳴いたり、ロバがいなくても、風は吹かないし、雲

お

おな

おろ

もの

ほけきよう

よ

も起きません。それと同じように、愚かな者が法華經を読んだり、

かしこ

もの

ほけきよう

こうぎ

くに

さわ

なにごと

お

賢い者が法華經を講義しても、べつに、国も騒がないし何事も起

しょうにん

あらわ

ほとけ

おな

ほけきよう

と

きません。しかし聖人が現れて、仏と同じように法華經を説い

とき

くにじゅう

さわ

しゃくそん

ざいせ

ときいじよう

だいなん

お

た時には、国中が騒ぎだして、釈尊の在世の時以上の大難も起

きようもん

か

こると經文に書かれてあります。